

総長書簡

《羊に命を得させ、しかも、豊かに得させるために》

(ヨハネ 10 章 10 節)

ドン・ボスコ生誕 200 周年の五つの実り

2015 年 7 月 25 日 ローマ

使徒聖ヤコブの祝日

1. 多くの実を結んだ恵みの年 - 2. 気づいてみれば、サレジオ会をより深く知ることができたから - 3. 200 周年の熟した実り - 3. 1. 会が、幸せなサレジオ会員の集いであるという夢 - 3. 2. 会が、神に満たされた信仰の人の集いであるという夢
3. 2. 1. 神を求める信仰の旅 - 3. 2. 2. 留まり、愛し、実を結ぶこと - 3. 3. 若者のため、最も貧しい若者のための情熱に満ちたサレジオ会員の集いという夢
3. 3. 1. 私たちはこれまでの歳月を通して、自分たちの忠実の道がいかなるものか、常に語り、自らに思い起こさせてきたから - 3. 3. 2. いつも仕えようとする、決して権力、金を求めることなく - 3. 4. 本物の福音宣教者、信仰の教育者の会という夢 - 3. 5. 常に宣教する会という夢
3. 5. 1. それが私たちの成り立ちの特徴であるから - 3. 5. 2. 私たちの生きる時代が絶えず求めているから

1. 多くの実を結んだ恵みの年

親愛なる兄弟の皆さん、

この書簡が皆さんのもとに届くころには、すでにコッレ・ドン・ボスコで何千人もの若者たちと共にドン・ボスコの誕生日を祝い、2014 年 8 月 16 日に同じコッレ・ドン・ボスコで正式に開始した生誕 200 周年を締めくくっているでしょう。

もちろん今年 2015 年の残りの日々、サレジオ世界の多くの場所でまだお祝いが続きます。

最高評議会報 419 号の書簡で、ドン・ボスコ生誕 200 周年の祝いとして開始した年には、二つの側面があると私は書きました：外的な、より一般に開かれた公式の側面、そしてもう一つの、内的な、より親密な側面です。

奉獻生活の年の開幕のメッセージにフランシスコ教皇が書いたことに一致し、最初のねらいは「感謝のうちに過去を振り返ること」¹です。私たちはまさに 200 周年の祝いで、このことを行ったと言えるでしょう。なぜなら、「ドン・ボスコが生まれてから 200 年、神から若者への贈りものとして私たちがここにいることに、主への感謝をおぼえる機会」²としてこの 200 周年を体験することを望んだからです。そして、サレジオ会支部のあるところ、どこでも行われた数多くのあらゆる祝祭の外的な、公式の、一般に開かれた側面において、**教会と世界へのドン・ボスコという神の贈りもの**を、私たちは認識し、感謝をさげることができました。

しかし今、私はむしろ、200 周年のもう一つの側面、より内的で、より親密な側面について話したいと思います。それはこの比類なく真に歴史的な出来事を私たちが生きたことによって、私たちの人生の中に、わがサレジオ会の兄弟一人ひとりの心に、私自身の心に、どのような深い跡が残されるのだろうかと私に考えさせ、願わせ、夢見させる側面です。

この側面こそ、私に**夢見**させるものです。私は **200 周年の祝いの実り**を夢見していますが、今からそれを説明します。

2. 気づいてみれば、サレジオ会をより深く知ることができたから

200 周年の実りのいくつかについて私は夢見たいと思っています。その実りは本当にいのちを与えてくれるものだと思います。なぜ夢見たいかという、すべての国、すべての管区をまだまだ訪れることができているながらも、私たちの会の現状を自分がかなりよく知るようになっていくと私は気づいています。

¹ 教皇フランシスコ使徒的書簡「奉獻生活の年にあたって - すべての奉獻生活者の皆さんへ」、ローマ、2014 年 11 月 21 日、I, 1

² 最高評議会報 419、総長書簡「より神のもの、兄弟のもの、若者のものとなる」7。

2014年4月12日に第27回総会が閉幕した後、そして最高評議会の最初の本会議に続き、今日までに、私は27か国—2014年に8か国、今年2015年には19か国—を訪問することができました。そしてこの一年半の間に、神のみ旨ならば、その数は32か国になるでしょう。もちろん、それは偶然ではなく、意図して、丹念に計画された訪問であり、要請は多すぎるとよくわかっていましたが、この年の類ない性格上、必要な訪問でした。

それぞれの管区の訪問から得られる全体像に加え、新しい管区長任命のために行われる諮問によって実際に提供される“スナップショット”によっても、知識を得ることができます。さらに、これらの諮問で会員たち自身が提供する管区に関する情報や意見もあります。この15か月間に、21人の新管区長が任命されました。

また、開催された7つの Team Visit と、二つの地域、南アジアと東アジア-オセアニアについて行った真剣な考察によって、私は最高評議会と共に、いくつかの管区についての知識を深める機会も得ることができました。

こういったすべての理由から、親愛なる兄弟の皆さん、皆さんに申し上げたいと思います。訪れ、知り、自分の目で見、読み、与えられたすべての助言に耳を傾けた上で、私は自分たちの会について夢見ることのできる立場にあると感じています。私たちの会では、主とドン・ボスコが、常にキリスト者の扶けなる母のまなざしの下、これら **ドン・ボスコ生誕200周年の実り** をくださっているのです。

3. 200周年の熟した実り

3.1. 会が幸せなサレジオ会員の集いであるという夢

サレジオ会員が幸せでないから私がこのように言っていると、ネガティブに考えてしまうとても人間的な誘惑を乗り越えるよう、この冒頭から皆さんを招きます。

全くその反対です！ サレジオ会員が幸せでないということではありません。私たちサレジオ会員の多くが自分の召命を生き幸せである、とても幸せであると私は確信しています。それには私自身が含まれます、私もとても幸せだからです。しかし、私たちは、**皆の、より大きな幸せに至る**必要があると、私は思っています。私たちの旅の歩みの中で、自分はやっていけない、この目標は自分にふさわしくないと感じ、道端に置いていかれてしまう会員が、一人もいないように。この目標は皆のものです、なぜなら人間として、この深

い望みは、私たちが存在へと呼ばれた瞬間から、すべての男性、女性の心に根ざすものだからです。

この大きな夢を皆さんと分かち合いたいと願うのはそのためです。私たちの会の夢、この会の中で、すべてのサレジオ会員が自分の存在の最も深いところで、心の中で、**本当の自分として、自らに言うことができること：私は幸せだ、ドン・ボスコのサレジオ会員として生きる**とき、**本当に生きている、喜びに満たされているのを感じる**、と。

教皇は私たち修道者に、この計画を提示しています：「喜びに満たされたあなたがたは、キリストに従い、キリストの福音を実践することが、自分の心を幸福で満たしているというのを、すべての人に示してください。この喜びを、皆さんのそばにいる人に感染させてください。」³

愛する兄弟の皆さん、肝心なのは次の点であると思います：より真剣に、そして喜びをもって生きることです。私自身の言葉で述べることもできますが、すでに先の総会で、私たちは神に感謝をささげながらこのことを言いました。「実に多くの会員の**忠実さ**、また**教会によって認められたサレジオ家族のメンバーの聖性**を、私たちは神に感謝します。神を探求することのすばらしさ、喜びにあふれドン・ボスコへの大きな情熱をもって生きられる福音の徹底した生き方のあかしをする、大人や若者、高齢の会員と若い会員、病気の会員と働き盛りの会員に、私たちは毎日、出会います。」⁴ 私たちの会が頂いている賜物です：日々ののちをもたらし、すばらしい、惜しみなく広い心をもって自らのいのちをささげる幾千もの会員たち。同じように感じない会員の痛みを、私は悲しく残念に思います。生活の中で、また心のうちに、傷の重荷を抱えるサレジオ会員、惨めに感じている会員、苦しみを表す会員がいます！ この兄弟たちが、主から来る力をもって、ほかの会員の愛情と近しさをもって、信頼を抱き、自分の人生の良いものに再び希望をもつことができるなら、と、私はどれほど願っていることでしょうか。困難な状況を経験している会員、あるいは主の呼びかけのときに私たち皆が感じた初めの愛のあの熱意を失ってしまった会員がいます；ドン・ボスコのサレジオ会員として何ら価値あるものをもたらさないような道をたどっている会員さえ、いるかもしれません。そのような会員が、“あのさらなる一歩を踏み出すために” 神に触れていただくように心を開くなら、私はどれほどうれしいことでしょうか；その会員たちが神に驚かされるために心を開くなら、私はどれほどうれしいこと

³ フランシスコ教皇：奉獻生活年開始のメッセージ，2014年11月30日，4

⁴ 第27回総会文書4

でしょうか。神は、疑いようもなく、私たちの想像をはるかに超える人生の境地へと、常に私たちを導かれるのです！

愛する兄弟の皆さん、ドン・ボスコについて私たちがどれほどよく知っているかにかかわらず、サレジオ会員と少年たちの快活さと幸せがドン・ボスコにとってどれほど大切であったか、私たちは皆、確信しています。その幸せは、犠牲の伴わないものではなく、そしてもちろん、神のうちに、神のために生きるという中心的、本質的な点に基づくものです。私たちは、人生における最も重要で長期的な視野をもつ決断を行い、それは主への「はい」という答えのうちに頂点に達しました。それ以降は、ほかのすべてのことは、意味に満ちた人生を生きていることを認識し、そのことを喜びながら、“心を尽くし”より豊かに生きるための助けであるべきです。

すでに第20回特別総会は、30年以上前に、使徒的勧告『福音のあかし *Evangelica Testificatio*』を引用し、「永遠に主のものとなる喜びは、たとえようのない聖霊の実です。皆さんは、すでにその体験をしています。この喜びに満たされ……信頼のうちに未来に立ち向かうことを学びましょう。」⁵と私たちに語りました。

実は、愛する兄弟の皆さん、私たち一人ひとりの幸せというこの夢を通して私が言いたいのは、私たちの美しい召命と献身が、単なる仕事であってはならないということです。時折あふれる喜びを感じることもあるけれども、時折“活動主義”に陥りそうな、あるいは陥ってしまう過剰な活動のある仕事です。それは私たちの内に燃えている炎を消し、フランシスコ教皇の言うあの「実際的で単調な憂鬱」に至らせてしまうことがあるのです。私たち一人ひとりの内に、ドン・ボスコの内にあったように、無私の心で、**神と若者への情熱に満ちて**生き抜く召命があることを、私は夢見ています。

実際にドン・ボスコは、頂いていた多くの賜物の中でも、「当時の疎外された若者たちに、……人生を祝祭として、また信仰を幸福として味わう可能性を示す」⁶ 優れた力を備えていました。

皆さんがご想像できるとおり、私たち一人ひとりへのこの私の夢は、会員一人ひとりのことを思いながら、総長としてのこの15か月間にすでに体験できたことと密接に関連します。例えば、サレジオ会員の司祭が、まず自分の望みに応える司教を見つけてから、教区

⁵ 第20回特別総会文書22に引用された使徒的勧告『福音のあかし』55

⁶ 第23回総会文書165

に移るための手続きを手紙で願い出てくるたびに感じる悲しさを、私は皆さんに隠すことができません。私は自問します：このような場合、ドン・ボスコへの愛やサレジオ会員になったときの熱意はどうなっているのだろうか。それまで体験したことは単なる司牧活動の一つの形にすぎず、簡単に別のものと取り換えられるのだろうか……？ 若いジョヴァンニ・カリエロが、ドン・ボスコに投げかけられたばかりの提案を、激しい葛藤のうちに思い巡らしながら、ヴァルドッコの中庭を行ったり来たりしたことが思い浮かびます。私たちが知っているように、それはメンバーが**サレジオ会員**と呼ばれることになる修道会を結成しようという提案でした。考え抜いた結果、カリエロはよく知られている言葉で宣言しました：「修道僧であろうとなかろうと、僕はドン・ボスコのもとにとどまる。」

1862年5月14日、22人の若者が、ドン・ボスコと共にサレジオ会員として最初の誓願を立てた日のことを私は考えていました（MB VII, 101）。彼らはドン・ボスコの傍らで成長した普通の若者たちでした。彼らは、新しい修道会を始め、大いなる熱意をもって誓願を立てる勇気をもっていました。ドン・ボスコに助けられて見ることでできたものに、信頼を置きながら。

私たちの起源について考えるとき、私は感動を覚えずにはられません、そして自分の強い確信を確認するのです。神を私たちの人生の第一の場にお迎えし、いつも若者たち、特に最も貧しく、最も私たちを必要とする若者を心に抱く私たちは、ドン・ボスコのサレジオ会員として幸せになるべく - “確定的” と言えるほどに - 選ばれているという確信です。私は本当にこのことを信じています、なぜなら、アパレシーダの文書にあるように次のことが確かだからです。「いのちはささげられるときに成長し、孤立と安楽の中にあるとき弱められます。実際、いのちから最も多くの益を得るのは、自らの安心を後にし、いのちを他者に伝える使命に、情熱をもってたずさわる人々です。」⁷

3.2. 会が、神に満たされた信仰の人の集いであるという夢

なにゆえにこの夢なのでしょう？ そしてなぜ、と皆さんは尋ねるかもしれませんが、私たちはそうではないと？

再び申し上げなければなりませんが、私は幾千ものわれらがサレジオ会員の信仰の深さと神の感覚について確信しています。では、なぜこの夢なのでしょう？ 答えはこれで

⁷ 第5回ラテンアメリカ・カリブ地域司教会議「アパレシーダ文書」（2007年6月29日）n.360

す：世界中に広がる私たちの会全体について考えるとき、疑いようもなく注目すべき、細やかな思慮をもって扱わなければならない事柄があります。それは、私たちが実に献身的に惜しみない心で働いている多くの場所、多くの国で、行っている仕事の上で私たちの存在は知られていますが、なぜそのことを行っているのか、肝心の深い動機がどこから来るのかは、知られていないということです。若者と共に行っている仕事、学校のネットワーク、特に技術訓練や職業教育は、大変評価され喜ばれています。ストリートチルドレンのための働きは、大きな尊敬と支持を受けています。多くのオラトリオに見られる献身と創造力は称賛されています。子どもの養護施設や貧しい若者のための寮は多くの注目を浴びています……。

しかしながら、私たちが何者なのか、ましてや、なぜそのことを行っているのか、なぜそのような生き方をしているのか人々が知らないということが、たびたびあるのです。そこで、これが私の夢です：サレジオ会修道者に会う人、あるいは私たちのいずれかの共同体に接することのある人、誰もが、信仰の人、深く揺るぎない信仰の人がそこにいることに心を打たれること。生き方、行い方の単純さのうちに、ほとんど意図せずして修道者の身分を明かす人、神によって神のために、神によって若者のために奉献された人であることの輝きを放つ人がそこにいることに、誰もが心を打たれることです。

3.2.1. 神を求める信仰の旅

兄弟の皆さん、この心にかかる思い、この認識は、新しいものではないと思います。私たちの会のさまざまな文書を読むと、第20回特別総会における“大いなる葛藤”は、まさに奉献と使命の間の緊張だったことがわかります。そして、第二バチカン公会議の光のもと、私たちのカリスマを新たな仕方で、大いに深くとらえ、また新しい会憲の豊かさのうちにカリスマを明らかにするため、総会は見事な働きの完成を見ました。何年もの時をかけた識別が、3度の総会にわたって行われました。第20回特別総会と、新しい会憲の試用期間が6年では十分でないという賢明にも判断し、もう6年延長した第21回総会、そして、「神の働き」という奉献の概念のうちにすでに深い成長の歩みがあった第22回総会です。

私たちの会では、カリスマにおけるアイデンティティー、あるいはアイデンティティーを構成するすべての要素の調和に関して、何ら問題はないと私は思っています。私たちは会憲やそのほかの多くの文書に、光で照らし富ませてくれる、豊かな数々の要素を見いだします。

鍵は、私たちのアイデンティティーを調和のうちに生きることに見いだされます。事業のなかで、事業を通してどれほどすばらしく良いことを成し遂げているとしても、私たちは社会福祉事業家ではなく、私たちの事業も社会福祉サービスの場ではないと、私たちは幾度も言い、思い起こしてきました。私たちは何よりも信仰者、修道者としての身分のうちに神によって奉献された者です。そして、「イエスが私たちの実存に再び触れてくださり、ご自分の新たないのちの交わりへと駆り立ててくださるままになること、それは何とすばらしいことでしょう。それによって何が起こるのか——、それは『わたしたちが見、また聞いたことを、あなたがたにも伝える』（1ヨハネ1・3）ということです。」⁸

兄弟の皆さん、この道こそ、今日、私たちが最もたどる必要のある道であると、私は深く確信しています。それは、私たちの信仰に配慮を注ぎ、養い、深めること（**信仰の人であること**）であり、私たちが行うすべてのことは、イエスに惹かれ、魅了されたと感じるから行うのであり、修道誓願においても私たちが奉献される、父である神に「はい」と言うことの大きな喜びを、自由のうちに感じたから（**神に満たされた人**）⁹ 行うのです。

しばらく前に修道生活について書かれたものを読んでいたとき、ある修道女が語ったことに深い感銘を受けました。そのシスターは、ウィーンでのある集会で、一部の男子、女子の修道者に見られる「古^{いにしえ}の無神論」について長上^{いんしやう}が語ったことを書いていました。シスターは述べています。残念ながら私たちは皆、口を開けば内にかかえる不平不満があらわになるような……そして**神にまつわることへの隠れた幻滅を表明する**と言えるような……修道女を（公平を期すため、そして男子修道者を、と言わねばなりません¹⁰）知っているのではないかと。そしてシスターは自らに問いかけます：「私たちの考え方、判断や行動

⁸ フランシスコ教皇『福音の喜び』264

⁹ ベッキ神父は、奉献生活の体験をこの美しい言葉で語っています：「この生き方に呼ばれたと自らの内に感じる人の体験：キリストが共にいてくださることを示されたときの類まれな光の輝きと心を魅了するキリストの姿、神に自らを奉献するとき人生の前に開かれる可能性の豊かさ、分かつたれない心で神を愛するとき体験する平和、使命に献身するときの喜び、キリストとの親密さを享受し、三位一体のいのちにあずかる特権。」J.E.VECCHI, *Educatori appassionati esperti e consacrati per i giovani*. Roma, LAS 2013, 112

¹⁰ 私自身の加筆

の仕方は、しばしば、眠ってしまっている信仰、愛のない神との関係によって条件づけられてしまっているのではないだろうか？」¹¹と。

この証言を前にして、詩編の問いかけが私の内に響くのが聞こえます：「お前の神はどこにいるのか？」（詩編 42・4）あるいは私たちの心に浮かぶことのあるあの問いが聞こえます：わが神よ、どこにおられるのですか？ これは、個人としても、共同体としても、私たちが大いに注目しなければならない問いであり、生きている状況であるように思いません。なぜなら、神への愛のない人生、または「神にまつわることへの隠れた幻滅」を抱えた人生に対する免疫は、子どもや若者たちの中で働くことでさえも、与えてはくれないからです。

3.2.2. 留まり、愛し、実を結びなさい

先の総会の一貫したテーマであった、ぶどうの木と枝（ヨハネ 15・1-11）のイコンの文脈で浮かび上がるこの三つの言葉は、イエスに深く根ざすことの必要性に気づくよう、私たちが招いています。しっかりとイエスのうちに留まるため、そしてイエスを通して、本当に魅力的な、若者に仕えるように私たちに導く兄弟愛に満ちた生活を生きるためです。

この理由から、信仰によって生きる者、神に満たされた者の集いである会を夢見るということは、その望みによって、**神の首位性**を私たちの生活の中に実現させることを目指すということです。私たちが何よりも「神を探し求める者」¹²、そして、若者、しかも最も貧しい若者のために、神の愛のあかし人でなければならないことを、決して忘れることなく。

サレジオの言葉で読む福音書のような私たちの大切な会憲は、ドン・ボスコの生涯と使命とが絶対的にそうであったように、この神の感覚、信仰への招きに満ちています。

会憲に次のようにあります。「青少年を救うために働くとき、サレジオ会員は父なる神のこころを体験し」（会憲第 12 条）、生きておられるキリストと身近に感じる御父との、率直な、心と心の対話を保ちます。したがってサレジオ会員は、サレジオ会の一員となるよう神に召されていることを意識し（会憲第 22 条参照）、召し出してくださる主と、主に応える弟子との、愛の出会いのしるしを生きつつ、信仰者が意識的に行うもっとも崇高な選択の一つを行います（会憲第 23 条参照）。同時に、この世のただ中に生き、また司牧生

¹¹ M. Beatrix Mayrhofer, SSND: *Paradigma innovador en la Vida Consagrada*. Revista Vida Religiosa -Monográfico-. Madrid, 5/2014 Vol 116, p. 65/(513)

¹² 第 27 回総会文書 32

活のさまざまな事柄を心にかけているサレジオ会員は、自分が派遣されている人々を通して神と出会うことを学びます。（会憲第 95 条参照）

兄弟の皆さん、会憲が与えてくれる光があれば、この夢に関して、何もつけ加える必要はないと思います。総会閉幕のときに皆さんを招いた言葉を、ここでただ繰り返したいと思います。私の最初のあいさつ、先を見据えた計画という明確な意向のある、いわゆる閉幕の言葉の中で、私は最も深い確信をもって、「生活・人生において神の首位性を生きることに見られる弱さ」が私たちのサレジオの DNA に組み込まれたものなどという考え方を、私は受け入れないと、皆さんに申し上げました。あのとき、そうではないと言いましたが、ここで同じ言葉を繰り返します。そうではありません、ドン・ボスコにとってそうではなかったからです。その反対にドン・ボスコは、生涯を深い信仰をもって神に満たされて生き、そのため、最後の息に至るまで少年たちに、いつも少年たちのために、そのいのちをささげたのです。ドン・ボスコは**神の筋書**に完全に捉えられた生活・生涯を送りました¹³。これが今日、私たちの会のため、ドン・ボスコのサレジオ会員である私たち一人ひとりのために、私が抱いている夢です。

3.3. 若者のため、最も貧しい若者のための情熱に満ちたサレジオ会員の集いと いう夢

これも、もう一つの夢、この 200 周年の体験の明らかな実りです。

若者のため、本物の教育的、福音宣教的な情熱をもって毎日生活をささげている実に多くの会員のあかしの尊い価値を、私は確信しています；特別な、優先的な愛をもって、最も貧しい若者に目を向けている多くのサレジオの拠点があることを、私は確信しています。

私はこのことを主に感謝します、そして先に申し上げたことを繰り返します：兄弟の皆さん、「さらに前進」しなければなりません。**すべてのサレジオ会員**です。ドン・ボスコのような心で、良き牧者のような心で、若者のために、自分たちの最良のものを与える者となるために。そして、最も貧しい人々に直接的あるいは間接的に仕えることのないサレジオ会支部があれば、私たちは痛みを覚えなければなりません。行うこと、考えること、決定することすべてが、何らかの形で最も貧しい人々、私たちの助けを最も必要とする人々のためであるように、私たちは**創意工夫**しなければなりません。

¹³ 第 27 回総会文書、総長による閉会のあいさつ 2.2.1 参照

フランシスコ教皇は、先に引用したメッセージで述べています：「世を眠りから目覚めさせてください、あなたがたの預言的な、潮流にさからうあかしによって、世を照らしてください！」¹⁴

この世を預言的に、潮流にさからって照らすためのサレジオ的な方法は、私たち皆が、私たちの存在するすべての場所で、この徹底した生き方をすることであると、私は心から思います。このように生活し、働くとき、何の言葉も要らず、そのメッセージは挑戦を投げかけるものとなり、大きなあかしの力を持つということ、私は少しも疑いません；そして、最も貧しい人々に出会う手段に不足することはないと、少しも疑いません。このことを確かに実現させるための動機をもたらす際に、神の摂理へのドン・ボスコの揺るぎない信頼を思い出しましょう。

3.3.1. 私たちはこれまでの歳月を通して、自分たちの忠実の道がいかなるものか、常に語り、自らに思い起こさせてきたから

この見出しによって、最も貧しい若者を優先的に選ぶよう方向づける公式の教えが私たちの会においては常にあったということを指摘したいと思います。その教えを受け、すべての会員、すべての支部・管区共同体が、そして会の中央そのものにおいて、これを実現させなければなりません。フランシスコ教皇は、ご自身が私たちに呼びかける希望は統計や成果に基づくものではなく、私たちが信頼を置いた方（2 テモテ 1・2）に拠るものであると思ひ起こさせ、数や効率という基準で物事を見る誘惑に屈しないように、ましてや自分たちの力に信頼を置くことのないようにと、私たちに招いています。¹⁵

私たちの会憲には、私たちの優先的選択として最も貧しい若者に言及する 7 つの条項があり、さらに、貧しい人々と連帯する必要性に注意を喚起する 5 つの条項があります。毎回の総会では、この「根本的選択」（プエブラでのラテン・アメリカ司教総会で用いられた言葉）に関して漸進的、継続的に思い起こさせる言葉を見いだすことができます。第 20 回特別総会は、若者の中でも最も貧しい若者、そして最も助けを必要とする人々、すなわち、神のご計画を人生において実現する可能性の最も低い人々のために私たちの力を注ぐ

¹⁴ フランシスコ教皇、奉獻生活の年開始のメッセージ 2014.11.30

¹⁵ フランシスコ教皇、使徒的書簡「奉獻生活の年にあたって - すべての奉獻生活者の皆さんへ」

13 参照

ことについて語りました¹⁶。第 21 回総会は、排除された、あるいは疎外された人々の地域に新たな拠点を創設するよう招き¹⁷、第 22 回総会は、各管区にあてた決議事項で、次のように求めました。「真に優先することによって、若者、彼らの世界、必要、貧しさに立ち帰ること。それは、若者たちの間で、新たにされた教育的、霊的な、心に響く存在となることによってです。必要ならば、貧しさが最も著しい場所へ私たちの事業を移設し、会員が、若者たちの中の最も貧しい若者のもとに行く、勇気ある選択を行うように。」¹⁸ 同様に、若者への信仰教育に目を向けた第 23 回総会は、新たな緊急性のある前線を特定し、私たちがまだ出会っていない若者たちを探し求めようとする意向を表す、“しるし”となる事業をもって応えるよう各管区に求めました。¹⁹

多くの管区で、多様な感性を備えた会員がこのプロセスに参加し、協力するように歩みが進められてきたのが見られ、喜ばしいことです。そうであるなら、私たちが行わなければならないことは、ほかに何かあるでしょうか。答えは、この向上の歩みを続けることです……貧しい少年あるいは貧しい少女がサレジオの家、ドン・ボスコの家に居場所を見つけられないとき、すべてのサレジオ会員一人ひとりが悲嘆に暮れるようになるまで！ 私たちを必要とするすべての貧しい少年、少女を世話できないことを、すべてのサレジオ会員一人ひとりが悔やむようになるまで。私たちがこのように心に感じるならば、必ず解決策を見いだせるに違いありません、そして最も貧しい青少年を選ぶことに、常にとても忠実でいられるでしょう。このことを心に留めましょう。

3.3.2. いつも仕えようとする、決して権力、金を求めることなく

兄弟の皆さん、皆さんのほとんどは使徒的勧告「福音の喜び」を読み、黙想したことと思います。もしまだであれば、そうすることをお勧めします。たくさんの実りを得られると確信します。最近、私は、権力と金という偶像を追い求めることについて言及している第 2 章を黙想しました。

私たちの会憲は、若者の中でもどのような若者たちに私たちが遣わされているか、たいへん美しい言葉で語っています：「主はドン・ボスコに、青少年、とりわけ、より貧しい青少年を、彼の使命の第一の、また主要な対象として示された。……わたしたちは、『放

¹⁶ 参照 第 20 回特別総会文書 181, また 70, 71, 76, 181, 596, 603, 612

¹⁷ 参照 第 21 回総会文書 158, 159, および第 20 回総会文書の 39-44, 515, 619 への参照

¹⁸ 参照 第 22 回総会文書 6

¹⁹ 参照 第 23 回総会文書 230

任され、危険な状態にある、貧しい青少年』を優先することを、ドン・ボスコとともに再確認する。これらの青少年は、愛され、福音化されることをいっそう必要としているからである。わたしたちは、特に、より貧しい地域を選んで活動する。」（会憲第 26 条）

兄弟の皆さん、私たちのカリスマの基本的で本質的な部分でもあるこの言葉の光に照らされてこの道をたどるなら、私たちの使命のアイデンティティー、あるいは私たちの忠実について、心配する必要はないと言いましょ。正しい道をたどっているからです。その反対に、もし私たちを最も必要とする貧しい若者と共にいるように心がけることなく、力と経済的手段を手にして安楽な状態にいるなら、私たちは不安になるべきです。そして、権威を奉仕としてではなく、物を所有し、物事を行うのを可能にする権力として行使する会員を前にするとき、私は心配になると言わねばなりません。その手に経済的な手段を握っているなら、あるいはそれを追い求めるなら、なおさらです。言わんとすることを説明するために、後で再びこのことについて触れたいと思います。

「福音の喜び」で、教皇は古典を引用し、力強く訴えかけます。教父、聖ヨハネ・クリゾストモは言います：「貧しい人々と富を分かち合わないことは、彼らから盗むことであり、その暮らしを奪い取ることです。私たちの手にあるのは私たち自身の財ではなく、彼らのものです。」²⁰ 私たちの心を死んだようにさせる繁栄の文化の中で、他者の痛みからくる叫びに共感する能力を失わせてしまう無関心のグローバル化を、教皇は指摘します（福音の喜び 54）。教皇は力強い言葉で、社会が生み出した“使い捨て”文化に目を向けさせます。その文化の中では、疎外された人々は“搾取される人々”ですらなく、捨てられたのけ者、“余分なもの”（喜びの福音 53）とされます。同様に教皇は、^{いにしえ}古の時代に金の牛を拝んだこと（出エジプト 32・1-35 参照）の現代版として現れる**新たな拝金主義**にも目を向けさせ、このように語ります。「権力欲と所有欲には際限がありません。」（福音の喜び 56）教皇は、次のようにはっきりと結論します。「貨幣は奉仕するものでなければならず、支配するものであってはなりません！」（同 58）

教皇の思いには教会と世界があります。私はそれよりもずっと小さな、私たちの会に目を向けています。そして、私たちの力は、少年少女、特に最も貧しい少年少女たちに仕え、その幸福を追求することのうちにありと確信しています。私たちの希望を数、事業、効率に置く誘惑に陥るのは自然なことです、それはたどるべき道ではありません。教皇は言

²⁰ 「福音の喜び」57, 聖ヨハネ・クリゾストモの言葉

います。「自己に閉じこもってはなりません。修道院でのささいな争いで息苦しくならな
いでください。自分で抱え込んだ問題にとらわれてはなりません。……全人類が待ってい
るのです。希望をすっかり失った人、困窮している家族、孤児、将来の見えない若者、病
人、孤独な高齢者、心は空虚な資産家、人生の意義を探している人、神を渴望している人。」

21

何という大いなる、特別な挑戦を私たちは投げかけられているのでしょうか。このこと
から、私たちの会が、ドン・ボスコ生誕 200 周年の後に、教育と福音化の使命のためだけ
に仕える経済的手段をもって、奉仕、謙遜、貧しさにおいて忠実に歩むものと自らを見な
す教会の一員になるという夢を、私は抱いています。そのために、私はただ、互いに助け
合おうと呼びかけたいと思います。時に、権威が奉仕というよりも権力のように行使され
るとき、私たちが助け合うように。人が役職を求めるとき、上に立つ者になろうとする
とき、互いに助け合うように；管理職の役割や、事業の上に立つことを、あたかも**人生に意
味を与える目標**であるかのように（他者のためと言いながら）追及する危険のあるとき、
その人を助けるように。権力を手にするために、物事や人の上に決定権を行使するため
にお金が使われるとき、私たちが助け合わなければなりません；共同体や事業のお金や経済
的手段の使用や管理が明瞭でなかったり、不透明であったりするとき、私たちが助け合
わなければなりません……互いに助け合いましょう。兄弟の皆さん、真理と福音の自由をも
って、いつも互いに助け合いましょう、なぜならこれらの危険は、私たちの間にも存在す
るからです。

3.4. 本物の福音宣教者、信仰の教育者の会という夢

兄弟の皆さん、これはもう一つ心にかかっていること、強く願う夢であり、この夢は、
私だけのものではありません。私たちの会の歴史全体を通して見られる夢であり、会のさ
まざまな文書、会憲、総会文書、歴代総長による実に多くの言葉から成る何百ものページ
が、私たちのこの次元、福音宣教と、信仰の教育者になるという次元に心かけるよう、
特別な配慮を促しています。

なぜこの夢なのでしょう。ベッキ神父のこの言葉が預言となることを、心から願うか
らです。ベッキ神父は福音宣教の優先性について語った際、次のように言っています：「膨

²¹ 教皇フランシスコ使徒的書簡「奉獻生活の年にあたって - すべての奉獻生活者の皆さんへ」 24

大な仕事の重圧の下で組織に関する心配や調整に忙しいとき、私たちは活動の目指している地平を見失う危険性があります。数多く存在する活動家、草の根理論家、組織の管理者のようになってしまい、慈善家としては立派かもしれませんが、キリストの明確なあかし人、キリストによる救いの業の仲介者、霊魂の養成者、恩寵の生活の案内役としては、貧弱な存在となってしまうのです。」²²

この言葉を読みながら、自分のサレジオ会員としての歳月の中で大きくなっていく確信は、まさにこのことだと私は感じました。そして同時に、うれしい驚きだったのは、エジディオ・ヴィガノ神父²³、またファン・E・ベッキ神父²⁴が先立ってそうしたように、この方向へ私たちを導こうとする確信と献身とを表す、パスクアーレ・チャーベス神父の実に多くの考察²⁵を見いだしたことでした。

ここに挙げたものは、すでに申し上げたように、福音宣教と信仰教育がいかに、確かに、私たちの会の歴史を通して見られる関心事であるかを示しています。

本質的な、動機づけとなる、ほかの多くの指摘を、私たちの会憲は与えてくれます。その中に、次のように教える言葉を私たちは見いだします。「わたしたちは、ドン・ボスコから受けついだ目標に忠実に従い、青少年、とりわけ、より貧しい青少年を福音化する」（会憲第6条）。そして、サレジオ会はカテキズムを教えることから始まったとドン・ボスコが私たちに伝えているように、「今日でも福音化と要理教育は、本会使命の根源である」（会憲第34条）。私たちはこの使命を次のように果たします：「わたしたちは全き人間キリストを志向する全人的向上の計画に沿って、教育し、福音化する。」（会憲第31条）そしてそれは、このように心から信じているからでもあります。「ご自分との出会いの恵みを提供なさるために、また私たちが若者の尊厳を認め、満ち満ちたいのちへと教育しながら、若者のうちにご自分に奉仕するようになるために、神は彼らのうちに私たちを待つておられる。」²⁶

²² J.E. VECCHI, 最高評議会報 373, 『サレジアニタ 第 54 号』総長書簡「今や恵みの時」p.84

²³ E. VIGANÒ, 参照 総長書簡: サレジオ会の教育の計画(AGC 最高評議会報 290); 新しい教育 (AGC 337); 学校における信仰教育(AGC 344); 私たちは教育する預言者 (AGC 346)

²⁴ J.E.VECCHI, AGC 357, 19sq; AGC 362, 13-16 『サレジアニタ第 47 号』目を上げて畑を見るがよい 色づいて刈り入れを待っている;

²⁵ P. CHÁVEZ, 『サレジアニタ第 59 号』聖人でありなさい: AGC 379, 14,15sq, 19sq; AGC 383, 70 sq; AGC 384, 19-20 and 25-28; AGC 386, 16-19 and 44sq;

²⁶ 第 23 回総会文書 95, サレジオ会青少年司牧部門「サレジオ会青少年司牧の枠組み」*Salesian*

あえて言いますが、私たちサレジオ会員は全員、この養成と情報を何らかの形で受け取っているでしょう。福音宣教の使命を遂行するとき困難に出遭うとすれば、それは一般的に、サレジオ会員であること、若者への宣教者であることのあるものを中心にあるものを私たちが知らないためではないと、私は本当に思います。私たちは本当に、このことを信じていると思います。「**キリストが宣言されなければなりません**。キリストを知ることは、すべての人にとっての権利です。」²⁷ そして福音宣教者、信仰の教育者として、「(若者が)父なる神の声を聴き、イエス・キリストを知ることを私たちは願います。福音を差し出すことが、人の人格を造り上げるため、またすべての若者にふさわしい全人的成長をとげるために、予測を超える力をもたらすと私たちは確信します。」²⁸

ほかの挑戦や困難があると思います。一つの大きな挑戦は、若者たちに必ずしもこれを受け入れる用意があるわけではなく、動機を感じているわけでもない中で、しばしば困難であるにもかかわらずこの仕事、使命を引き受けるために努力が必要なことです。世界の地域によっては、福音を言葉ではっきりと告げるとき、適切な術と教育法をもってそれを行ったとしても、必ずしも耕作に適した畑が見いだせないところもあります。この点で顕著だと思うのは、ヨーロッパです。そのような状況を前に退却するという反応は人間としてごく自然ですし、あるいは、道半ばで止まったり、信仰への導入に道を開く初歩的な要素にますます時間を費やすことになったりするという反応も、なおさらそうです。そのため、私たちの使命が高度に重要であると確信すること、そしてたとえ熱意や関心をもって受けとめられることがないと知っていても、この使命に全面的に取り組むために必要な力を見いだすことが、第一の大きな挑戦になります。一方、私たちは、困難、無関心、場合によっては拒絶の状況が、事の初めから福音宣教に伴うものであったことを認識する必要があります。また、宗教的状況の多様性のために、イエス・キリストを告げる私たちの歩みは遅くなり、社会的、人道的な活動に留まることもよくあります。社会的、人道的な活動自体は良いものですが、福音宣教と信仰教育がそれに組み込まれていないなら、私たちはまだ道半ばなのです。

また、私たちの生きるさまざまな社会的状況に見られる、神が必要であることの拒絶を含む、この冷淡さ、無関心という挑戦に、さらにほかの困難も加わります。私はあえてそ

Youth Ministry. Frame of Reference, Rome, 2014, 60 に引用。

²⁷ J. E. VECCHI, AGC 364, 18, サレジアニタ第 48 号, p.23

²⁸ サレジオ会青少年司牧部門, 前掲書, 64

れを、ある行動や決断の結果として私たちが支払う高い代償と呼びましょう：組織にとらわれること、負わなければならないと感じる管理運営の重荷、活動の運営、拡張、過剰、そのほかの多くのことが、場合によって私たちに縛っています。エネルギーは消耗され、サレジオ会員であることの召命の喜びと幸福は減退、あるいは全く失われてしまいます。何よりもそれによって私たちは、若者から引き離されてしまいます。若者と共にいて、いつも若者に仕えていないなら、福音宣教はできません。

兄弟の皆さん、私の言葉を誰一人、悲観的見方のしるしと受け取ってはほしくない、心から願います。私たちは悲観論者ではありません。反対に、これまで長きにわたって言ってきましたが、私たちはすばらしい修道会であると、引き続き宣言します。困難がないわけではありませんが、私たちは多くの良いことを行っており、そのことを主に大いに感謝しなければなりません。しかしながら、私がリスク、恐れ、困難、限界として取り上げたことは、何も新しいことではありません。私たちはこれを知っていますし、皆、何度も耳にしてきました。適正な分析と診断の後、私たちがどのように行動するかが決定的な問題となります。

この文脈に沿って、会の創立後、最初の数十年の間にドン・ルア、ドン・アルベラ、ドン・リナルディらが会にあてた書簡を読み、総長たちの与えた方向づけに私は大いに共鳴しました。それらは率直さにあふれた書簡で、親しみやすいスタイルで書かれ、会の成長、発展、組織の雰囲気、その光と陰と共に、また第一次世界大戦を含む、立ち現れつつあった数々の大きな挑戦と共に、とらえようとするものです。それらの手紙は、ドン・ボスコにおいて中心的なものであったものを“おろそかにする”危険を指摘しています：端的に言うと *Da mihi animas cetera tolle*、若者に、若者のために全面的に献身する私たちの、今日における福音化と教育です。総長たちは、この挑戦を前に、ドン・ボスコがサレジオ修道会にいのちをささげた根本的理由をおろそかにしないようにという単純でありながら力強い指摘を、迷うことなく与えています。

総長たち - 初代総長から最近に至る歴代総長 - のこの確信に一致しながら、私はこの書簡の中で、自分の心の深くにあることを皆さんに語っています。「私の夢 - その5つの点」と呼ぶことにしたもののなかで、私たちの会の生活と豊かさの大きな部分を示すことができていると、私は強く信じています。そして私たちが、この道を引き続き歩み、根本的なもの、私たちが本当に私たちがたらしめるものにおいて成長し、前進するという、大きな希望を抱いています。さまざまな機会に管区長たちと会ったとき、それぞれの管区にある、実にたくさんの善いもの、美しいものの姿が、直面するかもしれないさまざまな問題によっ

て霞^{かす}んでしまうのを許してはいけないと、話しました。困難な問題には取り組まなくてはなりません、前に向かって歩み、自分の最善、私たちの最善を尽くすようにと、一人ひとりのサレジオ会員を励ますほうがはるかに良いことです。すなわち、私たちが、教育者、福音宣教者として、**若者のための情熱に満たされ、神の筋書に参加して生きる者**であること、サレジオ会の兄弟と共に、共同体の中で、多くの男性、女性の教育者と共に、友人、献身的な信徒協働者と共に、ドン・ボスコが最初のサレジオ会員と協働者に伝えることのできた同じ熱意をもって、ドン・ボスコのこの夢を引き続き実現させていきたいと願っていることを、私たちの生き方のうちに示しながら、励ますことです。パウロ六世が私たちを「若者の宣教者」と呼び、与えられた形容に、ふさわしいものとなるために。

3.5. 常に宣教する会という夢

3.5.1. それが私たちの成り立ちの特徴であるから

会憲に次のようにあります：「まだ福音化されていない国民は、ドン・ボスコの強い関心と使徒的情熱の特別な対象であった。これらの国民はわたしたちの熱意を高め、燃やしつつける。宣教活動はサレジオ会の本質的な特徴の一つだからである²⁹。わたしたちは宣教活動をもって、一定の人間集団を対象とする福音化と教会の創設活動を辛抱づよく進めていく。」（会憲第 30 条）

ここで、私たちのよく知っていることを思い起こさせてください：ドン・ボスコは若いころから宣教師になる望みを抱いていました。ドン・ボスコの召命の識別に同伴したドン・カファッソは、その道を“^{さえぎ}遮り”、宣教地へ行くのは彼の道ではないと言いました（MB2, 160-161 参照）。しかしながら、ドン・ボスコの思いと心には宣教のことが常にあり、息子たちを通してそれを実現したのです。1875年11月11日に始まり、移民の霊的必要に応え、まだ福音を知らない人々に福音をもたらすため、ドン・ボスコは最初のサレジオ会員の一人の中からアメリカ大陸に派遣する者たちを選びました。この最初の宣教師派遣から、来たる2015年9月27日に予定されている派遣まで、146回の派遣が行われてきました。サレジオ会員の第一回宣教派遣から間もなく、サレジアン・シスターズも、毎年宣教地へ赴

²⁹ 斜体は筆者による

くようになりました。今日、派遣式は、多くの場合、男性、女性の信徒宣教師を含め、一緒に行われています。

それ自体が自ら語る事実、私が前の書簡（最高評議会報 419）で触れたことを忘れてはなりません。ドン・ボスコが亡くなった時点で、その年の会の目録によると、アメリカ大陸には、当時の会員全体の 2 割にあたる 153 名のサレジオ会員がいました。

1912 年に書かれたある書簡で、パウロ・アルベラ神父はドン・ボスコについて次のように述べています：「宣教はドン・ボスコの講話の中でいつも優先される題目であり、ドン・ボスコは若者の内に、宣教師になりたいという強い望みを呼び覚ますことができました。宣教師になることが、あたかもこの世で最も自然なことであるかのように。」³⁰

宣教の次元が、私たちの会のアイデンティティーを**構成する本質的特徴である**と、私はいつも確信してきました。私たちのさまざまな文書に当たってみればみるほど、この確信は強まりました。次のことは、これを証明します。第 19 回総会は「宣教事業が会の本質、目的の一部となるほどに、会の恒久的関心事であることを願ったドン・ボスコの理想」をよみがえらせるようにと、会に求めました³¹。ベッキ神父は在任中、次のように書いています：「宣教の感性は、選択的に身につける特質なのではなく、いつでも、どのような状況においても、サレジオ霊性の一部を成しており、このため、総長とその評議会とは、すべての管区に対し、……特別に注目すべき分野として、これを提示しました。」³²

遠い異国の地に一度も行ったことのなかったドン・ボスコが、ヴァルドッコの少年たちと共に活動し、この宣教の情熱、福音を広める熱意を、少年たちと若いサレジオ会員のうちにいかにかきたてたかを、私たちはよく知っています。ドン・ボスコのさまざまな書き物、ボレッティーノ・サレジアーノなど、役に立ち、時宜にかなうものであれば何でも、この宣教の夢を広めるために用いられました。

³⁰ パウロ・アルベラ神父のサレジオ会員にあてた書簡. Direzione Generale Opere Don Bosco, Torino, 1965, 133

³¹ 最高評議会報 244, p 178

³² J.E. VECCHI, 最高評議会報 362, 8, サレジアニタ第 47 号「目を上げて畑を見るがよい…」 p.67

3.5.2. 私たちの生きる時代が絶えず求めているから

私はこのように書きながら、このことに関して何も新しいことを言うつもりはありません。価値ある文書裏付けは数多くあります。しかし、自分の夢と言ったものについて、心に深くあるいくつかのことを強調したいと思います：

a.- 宣教の次元は、私たち一人ひとりの特徴とならなければなりません。なぜなら宣教の次元そのものがサレジオ精神の一部を成すからです。すなわち、それは、一部の人に付け加えるように与えられるものではありません。私たちの牧者の心の本質的な部分なのです。そしてもちろん、多くの会員が、“すべての人への *ad gentes*” 宣教師になるようにという、主からの特別な親しい招きを聞きます。

b.- これまで以上に私たちの会は、福音、教会、ドン・ボスコへの忠実のうちに、宣教する会であり続けなければなりません。私は別の機会に、私たちの地平に現れている宣教に関する挑戦や、宣教を強化する必要のあるいくつかの分野を挙げました。

c.- 今ここで、“すべての人へ、生涯をかけて遣わされる *missio ad gentes et ad vitam*” ために呼ばれていると感じる人々に、その呼びかけを受け入れるようにと、私の招きを新たにします。適切な時に、ふさわしい識別を行うことができるようにするためです。私は会員、たいていの場合、若い会員から手紙を受け取っています。宣教師になりたいと望んでいるけれども、長上（時には院長、時には管区長）が否定的であったり、行ってはいけないと言われたり、許可してくれないと、彼らは書いています。

ドン・ボスコの心をもって見るとき、主が呼びかけて召し出される道に、誰も障害物を置いてはならない、そして支部あるいは管区における困難が、これらの寛大な望みに影響を及ぼすべきではないと言えるのではないかと思います。兄弟の皆さん、決して忘れないようにしましょう、主は私たちよりもはるかに寛大な方です。

最後に付け加えたいと思います。時は熟しており、宣教のニーズもそのように私たちに教えています。ですから、連携し、総長の承知の上で、地域顧問と宣教顧問を通して、決まった期間に一時的な形で、より多くの召命のある管区の会員の助けを、会のほかのところや管区に提供できるでしょう。親愛なる管区長の皆さん、寛大であってください。ドン・ボスコは並外れて寛大でした。

生き生きとした愛情と確信をもって皆さんと分かち合いたいと望んだこの書簡を終えるにあたり、わがサレジオ会の兄弟の皆さんに思い起こしてもらいたいと思います。今は私

たちの会のこと、私たちの奉献と使命のことを、一人ひとりの人生を主に感謝しつつ、考える時であると。

今年は何度もヴァルドッコを訪れました。間もなく、再びヴァルドッコへ行きます。ドン・ボスコと私たちの母、キリスト者の扶けの取りなしによって、主への祈りの中で皆さんのことを思い出すことをお約束します。聖母は、ドン・ボスコにとってすべてを行われた方であるだけでなく、私たちの生きるこの特別な歴史的時にあって、教会の母、神の民の扶けとして、若者の福音宣教者、信仰への教育者である私たちと共に、歩んでくださる方でもあります。

この聖母マリアに、『信仰の光』のフランシスコ教皇の言葉をもって、私たちは祈りをささげます：

母よ、私たちの信仰の助けよ！
私たちの耳を開いて、みことばを聞くことができるようにしてください。
神のみ声と招きを知ることができますように。
神に従い、自分の故郷を離れ、
約束を受け入れたいという望みを私たちの心に燃え立たせてください。
どうかあなたの助けによって、私たちが心を開き、神の愛に触れられますように、
そして私たちも信仰をもって、神に触れることができますように。
あなたの助けによって、私たちが神に完全に身をゆだね、
神の愛を信じることができますように。
とくに試練の時、十字架のかげのもと、
私たちの信仰が成長するように招かれる時に。
私たちの信仰のうちに、復活した主の喜びの種を蒔いてください。
信じる者は決して独りきりではないことを、私たちに思い起こさせてください。
イエスの目をもってすべてのものを見ることを教えてください、
イエスが私たちの歩みの光となってくださいますように。
そして、この信仰の光が私たちの中で、ますます強められますように、
あの終わることのない日の太陽が昇るときまで。
その太陽こそ、あなたの子、私たちの主、キリストご自身なのです！

兄弟の皆さん、主の祝福のうちに、皆さん一人ひとりの幸いを心から祈ります。

親しみを込めて。

総長 アンヘル・フェルナンデス・アルティメ, SDB